

# 中国における日本語専攻学習者及び日本における 中国語専攻学習者の動機づけの比較

毛 賀 力 ・ 福 田 倫 子

## A Comparison on Learning Motivation between Major Japanese Learners in China and Major Chinese Learners in Japan

Heli Mao and Michiko Fukuda

摘要：学習動機は外語学習の重要情感因素。纵观日本和中国，对于专业学生的动机调查研究几乎处于空白状态。本文以在中国某大学的日语专业学生和日本某大学的中文专业学生为调查对象，使用同一份量表对其进行了调查后进行统计分析。结果发现，从动机的下位分类来看，中日学生的学习动机因子各自分为7个。共同的部分是“异国趣味因子”“国际交流因子”“自我完成因子”“文化理解因子”“工作因子”“外界影响因子”。非共同因子是“消极因子”和“社会性因子”。对比结果来看，中日两国学习者学习动机的总体强度没有什么区别。中国学习者的主导动机是工具型动机和融合型动机，而日本学生的主导动机则是融合型和诱发型动机。

### 1. はじめに

1990年代以降、中国の日本語教育研究会は国際交流基金と協力して、1993年、1998年、2003年の3回にわたり、中国における日本語教育機関の状況に関する調査を行った。その結果、中国にある約770の大学の中で、日本語学科を開設したのは、93年までに80校、98年までに114校であった。ところが、2003年には250校と、98年の2倍以上に増加した。

また、正確な数字ではないが、最近の情報によると、日本語教育機関として日本語学科を設置した大学は今までに358校にも上り、教員数は3000人、在学学生数は10万をも超えていると言われている。

一方、日本では、1970年代までは中国語教育がほとんどなされていなかったが、1978年に中日平和友好条約が締結されたのをきっかけに、中国語ブームになった。それまで第二外国語として選択されていたのはフランス語とドイツ語だったが、90年代の中ごろから、中国語は他の言語を抜いて、第1位となった。それにつれて、中国語専攻学科が設置される大学も増加し、88年の11ヶ所から最近は50ヶ所近くにまでなった。20年間で4倍程度伸びたことになる。

なぜこれほどの学生が相手国の言語を勉強するのか。一衣帯水の近隣の恩恵のほか、決定的な要因は中日間の貿易の増加ではないだろうか。両国の貿易総額は2002年の1000億米ドルから2008年の2663億米ドルまでに増え、中日両国は互いに重要な貿易パートナーとなった。これほどの規模の貿易を維持するためには、今後も専攻生の更なる増加が見込まれる。したがって、彼らの動機づけについてのアプローチは両国の外国語学習の現状を把握するだけでなく、今後の外国語学習への示唆を探ることに役立つだろう。

外国語学習において、学習動機づけ及び学習方略についての研究は重要だと考えられている。しかし、これまでの外国語学習の動機づけと方略に関する研究は欧米言語の学習者を中心に展開されており、本稿で筆者が探ろうとする中国の日本語専攻生、日本の中国語専攻生に関してそれぞれの学習動機づけや学習方略、及び学習動機や方略の比較などに触れた論文はほとんどないのが現状である。

## 2. 学習動機に関する先行研究

外国語学習における動機の研究は欧米言語を中心になされ、いくつかの分類がなされている。社会心理学からの研究はGardner & Lambert (1959, 1972) から始められたと言われている。彼らは社会心理学の見地から学習動機を「統合的動機づけ (integrative motivation)」と「道具的動機づけ (instrumental motivation)」の2つのタイプに分けている。「統合的動機づけ」とは、学習者が目標言語の言語や文化に興味がある、目標言語共同体の一員になりたいといった学習言語やその国の文化に自身を一体化させようとする動機づけである。一方「道具的動機づけ」は目標言語を習得することで将来の自己実現に近づいたり、仕事に役立ちたりするような功利的目的を持っている動機づけである。

教育心理学分野においては、縫部・狩野・伊藤 (1995) がニュージーランドの調査をもとにして、「統合的志向」、「誘発的志向」、「道具的な志向」、「日本理解」、「国際意識」、「学習への興味」といった6因子を抽出した。また、前半の3つの因子を「外発的動機」、後半の3つの因子を「内発的動機」と分類した。外発的動機とは報酬などを得ることを目的に生じた欲求である。内発的動機とは好奇心や知ろうとする行動を満たすことを目的として生じた欲求である。

また、日本語学習者に関する具体的な動機づけの研究もいくつか見られる。倉八 (1992)、成田 (1998)、郭・大北 (2001)、李 (2003) などは諸外国で学習する日本語学習者の学習動機について調査しているが、彼らの調査は韓国、タイやオーストラリアで行われたものであり、世界で2番目に学習者数が多い中国の学習者に対する学習動機、方略についての調査はほとんどなされていない。また、日本における中国語専攻者に対する動機づけの調査も管見の限り非常に少ない。

### 3. 中国国内及び日本国内の研究状況

Wang (2005) は中国国内における日本語学習者の学習動機について調査している。Wangは北京大学、清華大学、人民大学の91名の日本語非専攻生を対象とし、学習動機を「道具的動機」、「強制的動機」、「内発的動機」、「就職動機」、「統合的動機」に分類した。しかし、Wangの調査した対象は名門校の非専攻生であり、今回の調査の参考にはなるが、名門校でない地方大学はどうであるかについては言及していない。また、冒頭にも述べたように、中国の300以上の教育機関で日本語教育が実施されていることから、新しい調査が必要だと考えられる。

日本人大学生の動機についての研究は主に英語の分野において展開されてきた。中国語分野の研究は、少ないながら安 (2004) と任 (2008) が挙げられる。

安 (2004) は、日本人大学生の中国語学習動機における動機づけモデルについて研究した。安はGardnerと水野の分類により、学習動機を統合的動機、道具的動機と消極的動機に分けた。従来の研究では、学習動機と達成目標志向性が別々に研究されていたが、安は初めて日本人の大学生の学習動機、達成目標志向性、成績の因果関係を調べた。しかし、安の研究は動機づけの下位分類には言及しておらず、また調査の対象である中国語専攻者は60名のみであった。

任 (2008) の調査対象は茨城キリスト教大学文学部に在籍する中国語履修者200名の大学生である。任はGardner & Lambertの統合的動機づけ、道具的動機づけの分類により、中国語学習者の動機づけの要素を因子分析で分類した。「中国人・中国理解因子」、「仕事・資格獲得因子」、「国際性・将来性因子」、「語学習得因子」、「多言語との比較因子」など8つの因子が抽出された。任の調査対象は中国語を履修する大学生で、専攻生であるかどうかには言及していなかったが、茨城キリスト教大学

のホームページを調べたところ、中国語学部はないことがわかった。任の調査対象が専攻生ではないことが推測できるだろう。

学習者の文化背景、経歴により、動機づけも異なるが、(倉八1992)、中国と日本は同じ漢字文化圏であり、交流の主幹となる専攻生の学習動機及び学習方略の比較は双方の外国語教育を促進するだけでなく、学習者自身の学力の向上にも重要な役割を果たすことができるだろう。

本調査と研究の目的は以下の通りである。

- (1) 中日専攻大学生の語学学習の動機づけの下位尺度の解析及び比較
- (2) 中日専攻大学生の語学学習の学習方略の解析及び比較
- (3) 中日専攻大学生の動機づけと学習方略の相関関係

本稿は中日大学生の語学学習の学習動機の下位尺度の解析及び動機づけの比較に焦点を当てることとし、第2と第3についての研究は次の稿で論じたい。

## 4. 調査の概要

### 4-1. 予備調査

本調査に先立ち予備調査を実施した。2010年3月に中国上海にある地方大学の日本語専攻生30名を対象にし、自由記述式で「日本語学習の動機は何か」に回答してもらった。また、2010年6月に日本の埼玉県にある私立大学の中国語専攻生25名を対象にし、選択式で「中国学習の動機は何か」に回答してもらった。それらの回答に基づき、成田(1998)、郭・大北(2001)、高・程(2003)、任(2008)の調査を参考にし、中日学習者に使用する質問30項目を作成した。

### 4-2. 本調査実施年月

2010年6～7月に中国語授業及び日本語授業の時間を利用して集団的に実施した。

#### 4-3. 被調査者

中国語学習者は、日本の埼玉県にある私立大学中国語専攻生である。1年生65名、2年生82名、3年生30名の合計177名であった。日本語学習者は中国上海にある市立大学日本語学科の専攻生である。1年生55名、2年生55名、3年生55名の合計165名であった。

#### 4-4. 調査紙の内容

調査用紙はフェイスシート、質問紙からなる。フェイスシートでは被調査者の性別、学年を尋ねた。質問紙の第一部は、調査対象に中国語学習（日本語学習）の動機づけに関する質問30項目について、5段階評定で回答させた。質問紙の第二部は、調査対象に「言語学習方略尺度」という中国語学習（日本語学習）の学習方略に関する質問24項目について、5段階評定で回答させた。

本論文では第一部の学習動機にのみ言及し、第二部のデータには触れない。第一部のアンケートの詳細はすべて論文末に掲載した。各項目について、「A よくあてはまる」「B ややあてはまる」「C どちらともいえない」「D あまりあてはまらない」「E まったくあてはまらない」とし、当てはまる程度が強いほど低得点になるように、1から5までの得点を割り当てた。

### 5. 日本における調査の結果

#### 5-1. 調査対象者

日本における調査対象は177名で、ミスがある13部を除き、統計対象となるのは164名であった。

#### 5-2. 動機づけの記述統計及び共通性

動機付けの記述統計と共通性について表1、表2に示す。

中国における日本語専攻学習者及び日本における  
中国語専攻学習者の動機づけの比較

表1 動機付けの記述統計

Descriptive Statistics			
	Mean	Std. Deviation	Analysis N
1	3.7012	1.09197	164
2	3.7378	1.21273	164
3	2.1402	1.05020	164
4	2.8415	1.16144	164
5	2.8963	1.18072	164
6	2.5366	1.19503	164
7	2.3780	1.07555	164
8	2.1707	1.29468	164
9	2.5915	1.47708	164
10	2.4573	1.21013	164
11	2.6890	1.19595	164
12	2.6220	1.21484	164
13	2.6585	1.25536	164
14	4.0488	.93864	164
15	2.5183	1.26526	164
16	2.6646	1.14194	164
17	2.8171	1.23971	164
18	3.5976	1.36440	164
19	2.1220	1.02592	164
20	3.4756	1.20047	164
21	2.8598	1.13444	164
22	3.5366	1.26970	164
23	4.1646	1.49140	164
24	3.0610	1.35073	164
25	1.7622	.94553	164
26	3.1829	1.34874	164
27	2.6098	1.15918	164
28	2.7317	1.37505	164
29	2.6159	1.34939	164
30	2.2622	1.24271	164

表2 各項目の共通性

Communalities		
	Initial	Extraction
1	1.000	.650
2	1.000	.687
3	1.000	.581
4	1.000	.673
5	1.000	.671
6	1.000	.662
7	1.000	.735
8	1.000	.478
9	1.000	.630
10	1.000	.585
11	1.000	.678
12	1.000	.559
13	1.000	.764
14	1.000	.512
15	1.000	.749
16	1.000	.508
17	1.000	.613
18	1.000	.734
19	1.000	.669
20	1.000	.446
21	1.000	.559
22	1.000	.751
23	1.000	.783
24	1.000	.744
25	1.000	.642
26	1.000	.697
27	1.000	.733
28	1.000	.374
29	1.000	.543
30	1.000	.680

Extraction Method:  
Principal Component Analysis.

### 5-3. 因子の妥当性及び解析

因子分析（主成分分析法）後、項目23に関連する因子はないため、それを削除した。残りの29項目の妥当性を確認するために、KMOとBartlettの球面性の検定（表3）を行った。KMOの基準値は0.773で、Bartlettの球面性の検定の有意確率は0.000である。これは今回の調査に対して、因子分析が適切に行われることを示す。

表3 KMOとBartlettの球面性の検定

KMO and Bartlett's Test		
Kaiser-Meyer-Olkin Measure of Sampling Adequacy.		.773
Bartlett's Test of Sphericity	Approx. Chi-Square	1.843E3
	df	406
	Sig.	.000

残りの29項目について、主因子法・プロマックス回転で分析した。固有値の大きさと解釈の可能性から7因子解を採用した。累積寄与率は61.60%であった。0.30以上の負荷を示す項目を下位尺度とする。最終因子パターン行列（表4）を以下の表に示した。

### 5-4. 因子の命名

因子抽出後、クロンバックの $\alpha$ 係数を求めた。全因子の $\alpha$ 係数は0.842で、因子1から因子6までの $\alpha$ 係数は0.7以上であるため、信頼性があるということが確認できた。因子7の $\alpha$ 係数は低いため、その項目に対しては今後検討する必要がある。

今回の調査では、プロマックス回転後、「異国趣味因子」「他からの影響因子」「就職因子」「文化興味因子」「自我遂行因子」「国際交流因子」「社会的因子」といった7つの因子が抽出された。各因子と関連項目は表5に示す。以下は各因子の命名経過である。

中国における日本語専攻学習者及び日本における  
中国語専攻学習者の動機づけの比較

表4 最終因子パターン行列  
Pattern Matrix<sup>a</sup>

	Factor						
	1	2	3	4	5	6	7
27	.842						
11	.708						
4	.614						
21	.613						
17	.539			.321			
6	.461						
3		.631					
5		.580					
7	.396	.562					
8		.520					
20		.394	.319				
28		.313					
22			.847				
13		.313	.821				
24			.609				
15				.672			
9				.645			
30		.386		.600			
10				.470			
25					.637		
12					.473		
16					.465		
29					.354		
26						.713	
18		.306				.662	
1				.403		.456	
2							.713
19							.560
14							.330

Extraction Method: Principal Axis Factoring.  
Rotation Method: Promax with Kaiser Normalization.

a. Rotation converged in 9 iterations.

表5 各因子と関連項目

番号	関連項目 (負荷量の順序)	因子名	$\alpha$ 係数
因子1	27、11、4、21、17、6	異国趣味因子	0.839
因子2	3、5、7、8、20、28	他からの影響因子	0.765
因子3	22、13、24	就職因子	0.801
因子4	15、9、30、10	文化興味因子	0.709
因子5	25、12、16、29	自我遂行因子	0.741
因子6	26、18、1	国際交流因子	0.726
因子7	2、19、14	社会的因子	0.451

以下の項目は因子1の下位分類として、日本人学生の動機づけに影響を与える。内容は中国事情への認知、好奇心、探究心などの興味が中心となっているため、「異国趣味」と命名した。なお括弧内は因子負荷量を示す。

項目27：中国に旅行したら、役に立つと思う。(0.842)

項目11：中華料理が好きだ。(0.708)

項目4：中国の発展ぶりに興味があり、原因を知りたい。(0.614)

項目21：中国で生活したい。(0.613)

項目17：将来中国へ留学するために。(0.539)

項目6：中国に好感を持っている。(0.461)

因子2は以下の項目からなっている。それは他人の薦めあるいは環境要因と関連しているので、「他からの影響」と命名した。

項目3：第一希望の専攻ではないが、興味があった。(0.631)

項目5：中国語は漢字があるので、単位が取りやすい。(0.580)

項目7：友人に勧められた。(0.562)

項目8：両親・家族が選んでくれた。(0.520)

項目20：中国語試験(HSK)に合格するように。(0.394)

項目28：特に理由はなく、中国語の科目があったから。(0.313)

以下の項目は学習者の就職志望、生涯計画などと関連しているため、「就職因子」と命名した。

項目22：中国系企業で働きたい。(0.847)

項目13：将来就職のためになる。(0.821)

項目24：将来、中国語を教えるような職業につきたい。(0.609)

以下の項目は学習者が第二言語の学習とともに、対象国の文化に関する興味が深くなり、その文化的な常識や伝統的な芸術や国民的教養を視野に入れようとする心理が反映されている。そのため「文化興味」と

命名した。

項目15：中国伝統文化（書道、漢詩など）に興味がある。(0.645)

項目9：中国の歴史に興味がある。(0.637)

項目30：中学校で中国の古文、昔話を読んで、好きになった。(0.600)

項目10：中国風の映画、小説に興味を持っている。(0.470)

以下の項目は学習者が個人的な能力を向上させようという向上心や個人の意志が反映され、能力をアップさせようという目的が明らかにされているため、「自我遂行因子」と命名した。

項目25：たくさんの言語にチャレンジしたい、とりあえず今は中国語。  
(0.637)

項目12：理系科目より、文系のほうが得意だ。(0.473)

項目16：中国語は難しいから、それができると、自信がつく。(0.465)

項目29：これから中国語がわかるのは当たり前だと思う。(0.354)

外国語専門を選択するからには、外国もしくは外国人と接触することは避けられない。国際的交流の視点から以下の3つの項目を「国際理解」と命名した。

項目26：日中関係に興味を持っている。(0.712)

項目18：中国はこれから先進国になると思う。(0.662)

項目1：中国との交流が深まるように。(0.456)

以下の項目は前述した因子6と関連するところはあるが、以下の項目は対象国の言語を習得することが、社会的な機能を持つという視点から、「社会的因子」と命名した。

項目2：日本のことを中国人にわかってもらえるように。(0.713)

項目19：国際理解を深め、日中友好の一助になるように。(0.560)

項目14：将来、国のために役に立つには中国語が必要だと思う (0.319)

## 6. 中国における調査の結果

### 6-1. 調査対象者

中国における調査対象は165名で、ミスがある11部を除き、統計対象となるのは154名である。

### 6-2. 動機づけ記述統計及び各項目の因子共通性

動機付けの記述統計と共通性について表6、表7に示す。

### 6-3. 因子の妥当性及び解析

因子分析（主成分分析法）後、項目23に関連する因子はないため、それを削除した。残りの29項目の妥当性を確認するために、KMOとBartlettの球面性の検定（表8）を行った。KMOの基準値は0.713で、Bartlettの球面性の検定の有意確率は0.000である。これは今回の調査に対して、因子分析が適切に行われることを示す。

残りの29項目について、主因子法・プロマックス回転で分析した。固有値の大きさと解釈の可能性から7因子解を採用した。累積寄与率は63.58%であった。単独で0.30以上の負荷を示す項目を下位尺度とする。最終因子パターン行列を表9に示す。

### 6-4. 因子の命名

因子抽出後、クロンバックの $\alpha$ 係数を求めた。全因子の $\alpha$ 係数は0.787で、因子1から因子6までの $\alpha$ 係数は0.7以上であるため、信頼性があるということが確認できた。因子7の $\alpha$ 係数は低いため、その項目に対しては今後検討する必要がある。

今回の調査では、プロマックス回転後、「就職因子」「文化興味因子」「異国趣味因子」「他からの影響因子」「自我遂行因子」「国際交流因子」「消極因子」といった7つの因子が抽出された。各因子の関連項目は表10に示す。紙面の制限で、各因子の命名過程は省略する。命名過程は日本人学生の動機づけの命名を参照する。

中国における日本語専攻学習者及び日本における  
中国語専攻学習者の動機づけの比較

表6 動機付けの記述統計

Descriptive Statistics			
	Mean	Std. Deviation	Analysis N
1	2.0909	1.02494	154
2	3.5714	1.30788	154
3	2.9805	1.06317	154
4	2.4545	1.28892	154
5	2.8896	1.21839	154
6	2.7662	1.20886	154
7	2.8377	1.14029	154
8	3.1299	1.00131	154
9	2.7597	1.16628	154
10	2.9351	.96118	154
11	1.9481	1.11901	154
12	1.9870	1.04154	154
13	2.7532	1.06219	154
14	2.5455	1.18317	154
15	3.1948	1.09710	154
16	1.9156	1.03502	154
17	2.8312	1.45883	154
18	3.0000	1.08465	154
19	3.6234	.90082	154
20	2.3506	.95337	154
21	1.7273	.97868	154
22	2.8506	1.16475	154
23	3.7208	1.60675	154
24	2.6883	1.23415	154
25	1.8377	1.08146	154
26	2.3506	.99366	154
27	1.8442	.92975	154
28	2.6169	1.21643	154
29	2.9740	1.18789	154
30	2.5065	.89477	154

表7 各項目の因子共通性

Communalities		
	Initial	Extraction
1	1.000	.698
2	1.000	.759
3	1.000	.817
4	1.000	.534
5	1.000	.528
6	1.000	.723
7	1.000	.795
8	1.000	.817
9	1.000	.672
10	1.000	.661
11	1.000	.659
12	1.000	.814
13	1.000	.603
14	1.000	.548
15	1.000	.716
16	1.000	.826
17	1.000	.623
18	1.000	.546
19	1.000	.455
20	1.000	.564
21	1.000	.657
22	1.000	.718
23	1.000	.696
24	1.000	.497
25	1.000	.748
26	1.000	.679
27	1.000	.478
28	1.000	.609
29	1.000	.629
30	1.000	.656

Extraction Method:  
Principal Component Analysis.

表8 KMOとBartlettの球面性の検定

KMO and Bartlett's Test		
Kaiser-Meyer-Olkin Measure of Sampling Adequacy.		.713
Bartlett's Test of Sphericity	Approx. Chi-Square	2.033E3
	df	406
	Sig.	.000

表9 最終因子パターン行列

	Factor						
	1	2	3	4	5	6	7
13	.792						
22	.752						
17	.712						
20	.606						
24	.452						
30		.752					
10		.730					
15		.705					
9		.632					
6		.570					
8			.858				
3			.848				
7			.830				
21				.749			
4				.573			
18				.498			
27				.447			
11				.420			
29				.384			
12					.868		
16					.861		
25					.736		
2						.864	
1				.344		.635	
26						.515	
19						.373	
28							.686
5							.461
14							.416

Extraction Method: Principal Axis Factoring.  
 Rotation Method: Promax with Kaiser Normalization.

a. Rotation converged in 8 iterations.

表10 因子名と関連項目

番号	関連項目名	因子名	$\alpha$ 係数
因子1	13、22、17、20、24	就職因子	0.799
因子2	30、10、15、9、6	文化興味因子	0.851
因子3	8、3、7	他からの影響因子	0.783
因子4	21、4、18、27、11、29	異国趣味因子	0.710
因子5	16、12、25	自我遂行因子	0.856
因子6	2、1、26、19	国際交流因子	0.702
因子7	28、5、14	消極因子	0.441

## 7. 中日大学生の言語学習動機づけの比較分析

### 7-1. 大学生の動機づけの比較

上記の統計により、中日大学生の動機づけの下位尺度が解析できた。動機づけへの因子の寄与率<sup>1</sup>を図1と図2に示す。日本及び中国各因子の独立サンプルのT検定を表11に示す。

全項目の平均値は、中国（ $M=2.66$ ）は日本（ $M=2.85$ ）よりやや低い。また、今回の調査では、7つの因子が抽出されたが、「社会的因子」と「消極因子」は $\alpha$ 係数が低く、今後検討する余地があるため、残りの6つの因子を分析対象とする。

伝統的な動機分類方法によると、「就職因子」は道具的動機で、「他からの影響因子」以外の因子は統合的動機に属する。「他からの影響因子」は縫部ら（1995）が命名した「誘発的志向」に似ていると考える。誘発的志向とは、いい成績を取りたい、周囲の人に言われて勉強を始めたなどの志向である。縫部らは日本語学習を目的視かあるいは手段視することにより、「誘発的志向」と伝統的な分類による「道具的動機」を統合して「外発的動機」と称した。周囲からの薦めという視点から見

1 因子寄与を観測変数の数で割ったものを寄与率と呼ぶ。単位はパーセント。寄与率を見れば、その因子が全体に対してどのくらい寄与しているのかが読み取れる。固有値が大きいほど、寄与率が高い。

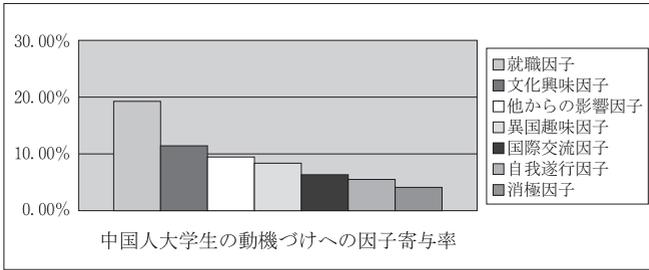


図1 中国の日本語学習者の動機づけへの因子寄与率

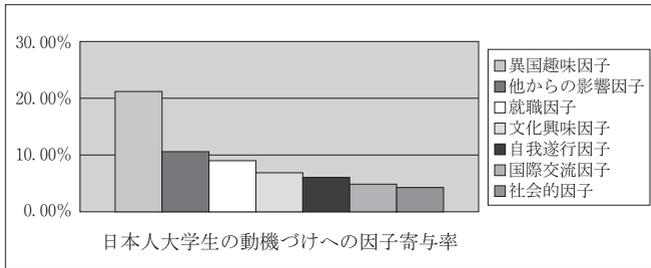


図2 日本の中国語学習者の動機づけへの因子寄与率

表11 T検定による各因子の比較

	中国平均値	日本平均値	T値	有意確率
全項目	2.66	2.85	4.031	0.19
就職因子	2.69	3.08	3.829	0.00
文化興味因子	2.83	2.45	-9.830	0.00
他からの影響因子	2.98	2.62	4.763	0.01
異国趣味因子	2.97	2.72	-5.905	0.00
自我遂行因子	2.11	2.41	-7.029	0.00
国際交流因子	2.90	3.31	11.831	0.02
社会的因子	なし	3.39		
消極因子	2.91	なし		

ると、「他からの影響因子」は「誘発的動機」乃至「外発的動機」に帰属しても問題はないが、今回抽出された「他からの影響因子」の項目を見ると、「他人からの薦め」だけではなく、「第一専攻ではない」といった環境の影響などの項目もあるので、ここで敢えて中日大学生の学習動機を「統合的動機」、「道具的動機」、「誘発的動機」（すなわち「他からの影響動機」）と3分類してみた。

## 7-2. 主な因子の比較

まず、中国人大学生の学習動機づけに最も強く影響したのは「就職因子」で、動機づけへの寄与率は19.30%である。下位分類の負荷量順にみると、「将来就職のためになる」、「日系企業で働きたい」、「将来日本へ留学するために」「日本語能力試験（JPT）に合格するように」などで、すべて就職、または就職につながることに関連しており、中国人大学生の学習目的が明確に反映されている。JPTは就職に関連していないようにみえるが、JPTに合格しなければ仕事がほとんどないのはよく知られていることである。

Wang（2005）の調査した学生の1番目の動機づけは「娯楽動機」であった。Wangの調査した学校（人民大学、北京大学など）はエリート大学で、中国の大学の中では10%に過ぎない。エリート大学の学生であれば就職のことは全く心配しなくてもよいが、90%以上の中国の大学は普通大学で、厳しい就職のプレッシャーに直面しなければならない。どんな大学に入るか、どんな専門を選ぶか、どの資格証明書を持つか、それらはすべて学生の将来及び社会的地位に深く関係する。特に、十年間続けられた大学の拡大が原因で、外国語、中国文学および法学専門といった文系学生は就職のことを見据えて大学生活を送らなければならない。

日本人大学生の「就職因子」の因子寄与率は9.01%、因子の平均値は

3.08で、中国人学生に比べてやや高く、就職面に関わる動機はそれほど強くない傾向が見られる。だからといって日本人大学生が就職のことを考えないわけではないだろう。ここで注意すべきなのは「就職因子」の後ろに潜んでいるのは現在学習している専門への期待度である。すなわち、日本人が中国語を専門とすることへの期待度はそれほど高くないと考えられる。原因は様々であろうが、まず、大学への期待度が高くないことが挙げられる。日本は70年代以後、大学もエリート教育から大衆化教育に転換した。大学生になるのはごく普通のことである。大学に入ろうと思えば、誰でも入れる時代が80、90年代から始まったと言われている。次に日本は先進国で、中国人留学生が非常に多い。いま、中国語専攻の学生は留学生と比べると、語学力において競争力は低いと考えられ、企業側も中国語力の高いネイティブスピーカーの学生を募集する傾向が強いと言われている（スポーツニッポン 2010年7月6日）。

次に、「文化興味因子」の動機づけへの因子寄与率も中日の大学生で異なる。中国人大学生では動機づけへの寄与率は2番目で11.4%である。一方日本のほうは4番目で6.5%である。平均値から見ると、中国は2.83で、日本の場合は2.45であり、「ややあてはまる」と「どちらかともいえない」の間にある。各因子の下位項目の順序を見てみると、中日大学生の対象国への文化理解は異なるようである。中国人大学生の文化興味の因子の下位尺度では、負荷量が最も高いのは「漫画などを読んで、好きになった」、次に「日本の映画、小説に興味を持っている」である。日本では、トップとなっているのは「中国伝統文化（書道、漢詩など）に興味がある」、次に「中国の歴史に興味がある」、最後に来るのは「中国風の映画、小説に興味を持っている」である。すなわち、日本人大学生が中国文化に対して抱いている興味は依然として書道、歴史などといった伝統文化に留まっている。それに対して、中国人大学生の

ほうは日本の流行文化への興味であり、その違いが明確に表れている。

「他からの影響因子」は日本人大学生の動機づけに2番目に強く影響している。因子への寄与率は10.4%である。中国の「他からの影響因子」の寄与率は約9%で、寄与率から見るとほとんど同じである。因子の平均値からみると、中国(M=2.98)、日本(M=2.62)で、中国のほうが有意に高い。中国の下位項目は「両親・家族が選んでくれた」、「第一希望の専攻ではなく、しかたがなく」などである。日本の下位項目は「第一希望の専攻ではないが、興味があった」、「中国語は漢字があるので、単位が取りやすい」、「両親・家族が選んでくれた」などである。すなわち、中国人大学生は両親からの薦めで選択の場合が多いことが推測できるだろう。日本の場合では、易しさ、仕方なくという発想から選択する場合が多いようである。

日本人大学生の学習動機に最も強く影響したのは「異国趣味因子」で、動機づけへの寄与率は21.12%である。中国趣味、日本趣味などといった異国趣味は異文明の物事・風俗に対して抱かれた憧れや好奇心などである。日本の「異国趣味」の下位項目を値の高い順に見ると、「中国に旅行したら、役に立つと思う」の因子負荷量が最も高い。次に来るのは、「中華料理が好きだ」、「中国の発展ぶりに興味があり、原因を知りたい」などである。それに対して、中国人大学生の「異国趣味因子」の因子寄与率は8.27%である。下位項目を見ると、「日本で生活したい」「日本はまだこれから発展していくと思う」「日本の発展ぶりに興味があり、原因を知りたい」の因子負荷量が高い。すなわち、日本人大学生が中国に対して持っている印象は古くて神秘的で未知な国へのロマンチックな情緒が溢れている。中国の場合では先進国への憧れ、そこに融合する気持ち強いようである。

「自我遂行因子」の両国大学生の動機づけへの寄与率はそれぞれ6.13%

と5.76%である。平均値から見ると、中国（M=2.11）も日本（M=2.41）もかなり高い。この因子は動機づけだけでなく、学習者の学習意欲ややる気やニーズなどが反映される。しかし、問題となるのは自信があり、学習意欲が強いといっても、その自信をどう維持させるか、どう学習行動へ転化させるか、それはこれから考えなければならないことである。

「国際交流因子」に関して、日本の大学生の動機に対する寄与率は4.75%、平均値は3.31で、それほど高くない。それに対して、中国人大学生の平均値は2.91で、日本より有意に高いが、因子への寄与率が6番目で、5.36%しかないので、中国人大学生の国際交流関与欲望が強いとは断言できない。すなわち、両国の学生とも国際交流への関心は高くないと言えよう。

## 8. まとめ

以上の調査より、7つの因子に分類して、中日両国の学生の動機づけが解明された。因子の寄与率により、中国人大学生の主な動機づけは「道具的動機」及び「統合的動機」の組み合わせであることが明らかになった。一方、日本人大学生の主な動機づけは「統合的動機」及び「誘発的動機（「他からの影響」）」である。このような動機づけの下位分類の比較を通じ、今後の中国語及び日本語教育への効果的示唆が得られるだろう。

どのような動機づけの組み合わせが学習効果の向上に役立つかを探ることは非常に有意義な課題である。ただ、本研究では成績についての調査はしていないので成績との相関関係は判断できない。学習効果と動機との関係については諸説ある。例えば、融合的動機が強いほど、学習効果が高く、また、誘発的動機が強いほど、学習効果が高い（成田1998）。エリート意識と道具的動機が強いほど、学習効果がある（郭・

大北 2001) などである。無論、動機づけと学習効果の関係は非常に複雑なので、それは今後の課題としたい。

## 参考文献

- 安寧 (2003) 「日本人大学生の中国語学習における動機づけモデル」『京都大学大学院教育学研究科紀要』49号, 314-326
- (2004) 「中国語学習における学習動機, 達成目標志向性, 学習行動, 教授法の好み, 成績の間の関連性」『京都大学大学院教育学研究科紀要』50号, 227-239.
- 李受香 (2003) 「第2言語及び外国語としての日本語学習者における動機づけの比較—韓国人日本語学習者を対象として」『世界の日本語教育』13, 75-91.
- 岩淵千明 (1998) 『あなたもできるデータの処理と解析』福村出版
- 加賀美常美代 (2002) 「言語学習における動機づけ」『言語文化と日本語教育』5月特集, 312-314.
- 郭俊海・大北葉子 (2001) 「シンガポール華人大学生の日本語学習の動機づけについて」『日本語教育』110号, 130-139.
- 倉八順子 (1992) 「日本語学習者の動機に関する調査—動機と文化的背景の関連」『日本語教育』77号, 129-141.
- 高一虹・程英 (2003) 「中国大学生の学習動機と動機強度の関係」『外語研究』1号, 60-64.
- 国際交流基金 (2008) 『海外の日本語教育の現状』国際交流基金
- 成田高広 (1998) 「日本語学習動機と成績との関係—タイの大学生の場合」『世界の日本語教育』8号, 1-10.
- 任利 (2008) 「日本人大学生の中国語学習に対する動機: 因子分析を用い

た探求」『筑波日本語研究』13号, 13-32.

縫部義憲・狩野不二夫・伊藤克浩 (1995) 「大学生の日本語学習動機に関する国際調査—ニュージーランドの場合」『日本語教育』86号, 162-172.

堀野緑・市川伸一 (2002) 「高校生の英語学習における学習動機と学習方略」『教育心理学研究』45号, 140-147.

松尾太加志 (2002) 『誰も教えてくれなかった因子分析』北大路書房

守谷智美 (2002) 「第二言語としての日本語の動機づけ研究を焦点として」『言語文化と日本語教育』5月特集, 315-329.

レベッカ L. オックスフォード 宍戸通庸、伴紀子 (訳) (1994) 『言語学習方略—外国語教師が知っておかなければならないこと』凡人社

Wang WanYing (2005) 「大学非専攻生日本語学習動機づけと動機強度についての研究」『日語学習と研究』3号, 38-42.

## 参考資料

スポーツニッポン

<http://www.sponichi.co.jp/society/flash/KFullFlash20100706020.html>

(2010年12月19日検索)

中国における日本語専攻学習者及び日本における  
中国語専攻学習者の動機づけの比較

付：以下は調査用紙の内容である。中日両国で行われた調査であり、括弧で示すのは中国の調査内容である。

本調査はみなさんの中国語（日本語）学習についての調査です。

学年 1年生 2年生 3年生 4年生

性別 男 女

I. あなたが中国語（日本語）を学習しようと思った動機をお尋ねします。

以下の基準を参考に、A---Eから該当する項目に○をつけてください。

- A よくあてはまる B ややあてはまる C どちらともいえない  
D あまりあてはまらない E まったくあてはまらない

1. 中国（日本）との交流が深まるように
2. 日本（中国）のことを中国人（日本人）にわかってもらえるように
3. 第一希望の専攻ではないが、興味があった（第一希望の専攻ではなく、し  
かたがなく）
4. 中国（日本）の発展ぶりに興味があり、原因を知りたい
5. 中国語（日本）は漢字があるので、単位が取りやすい
6. 中国（日本）に好感を持っている
7. 友人に勧められた
8. 両親・家族が選んでくれた
9. 中国（日本）の歴史に興味がある
10. 中国風（日本風）の映画、小説に興味を持っている
11. 中華料理（日本料理）が好きだ
12. 理系科目より、文系のほうが得意だ
13. 将来就職のためになる
14. 将来、国のために役に立つには、中国語（日本語）が必要だと思う
15. 中国伝統文化「書道、漢詩など」に興味がある（日本伝統文化「茶道など」  
に興味がある）
16. 中国語（日本語）は難しいから、それができると、自信がつく
17. 将来中国（日本）へ留学するために
18. 中国はこれから先進国になると思う（日本はこれから発展していくと思う）

19. 国際理解を深め、日中友好（中日友好）の一助になるように
20. HSK中国語試験（JPT日本語能力試験）に合格するように
21. 中国（日本）で生活したい
22. 中国企業（日系企業）で働きたい
23. 知人には中国人（日本人）がいる
24. 将来、中国語（日本語）を教えるような職業につきたい
25. たくさんの言語にチャレンジしたい、とりあえず今は中国語（日本語）
26. 日中関係（中日関係）に興味を持っている
27. 中国（日本）に旅行したら、役に立つと思う
28. 特に理由がなく、中国語（日本語）という科目があったから
29. これから中国語（日本語）がわかるのは当たり前だと思う
30. 中学校で中国の古文、昔話を読んで、好きになった（漫画などを読んで、好きになった）

謝辞：本論文を結ぶにあたり、本研究を遂行する上でご指導、ご鞭撻とご援助を頂いた日本文教大学文学部の長谷川清教授、前浜葉子さん及び文教大学文学部の先生方及び学生さんに感謝の意を深く表します。なお、本論文は2010年上海海事大学学校基金（番号20100114）の援助を得ており、この場をお借りして感謝いたします。